

脇田 修著

近世封建社会の経済構造

大石 慎三郎

一 はじめに

脇田修氏が『近世封建社会の経済構造』という大著を出されてから約一年余になる。私は折にふれ、必要に応じてこの著書をひらいてきた。云うまでもなく、私は本書の主要部分をなす近世初期については全くの素人で、したがって素人印象記といったものしか書けぬのだが、それを承知でもかくも、編集部の強い要請におされて、と言訳をしながら筆をとってみる気になったのは、やはりそれだけ本書に魅力を感じたからに他ならない。

いわゆる社会経済史の分野においては太閤検地論とか幕藩体制構造論とか、歴史のある段階の構造論を、ある特定の視角から行うといった、どちらかといえば一面的、かつ固定的に、かつ歴史的に動的に捉えようとした業績はきわめて少なかった。脇田氏の本書は、その点、今迄のものところがって単に題名のみでなく、内容においても、市場構成論を中心にその歴史の変遷、さらにその市場の中に包摂されるものとしての農村構造、さらに労働力等を、その相互関連まで含みながら、然も豊臣政権時代から元禄

時代に至る長期間にわたって捉えようとする、誠に気宇壮大な大野心作であって、私如き気の小さい人間には只々おどろくばかりの労作である。しかもその叙述方法も、従来の研究がおちいりがちであった固定的・硬直的な分析を排し、事物を努めて流動的・かつ発展的にとらえようとする前向きな努力で貫かれている事も本書の注目すべき特色といえよう。しかしこのような脇田氏の意欲と善意と努力とが、充分に実を結んでいるか、という点になると問題はあるといわざるを得ないだろう。事の順序として目次をあげてみよう。

目次

- 第一章 近世的全国市場の形成
 - 第一節 豊臣政権の市場統制
 - 第二節 幕藩体制下の全国市場
- 第二章 社会的分業の特徴
 - 第一節 都市と農村の分業
 - 第二節 特産物生産の展開
 - 第三節 領主の市場統制
- 第三章 近世農村構造とその展開
 - 補論Ⅰ 安良城盛昭著『幕藩体制社会の成立と構造』について
 - 補論Ⅱ 宮川満著『太閤検地論』について
 - 第一節 太閤検地の意義
 - 第二節 近世前期、先進地域の農村構造
 - 第三節 農業経営の展開
 - 第四章 近世前期における奉公人の研究
 - 第一節 幕藩体制と奉公人問題
 - 第二節 農村における雇傭労働の展開
 - 第五章 国内市場の形成

第二節 小ブルジョア市場の成立

第二節 全国市場の展開

第三節 幕府商業統制策の展開

——むすびにかえて——

以上であるが、著者は本書執筆の目的および構成を次のように述べている。まず執筆の目的を「本書は、近世封建社会の経済構造と、その展開を明らかにしようとしたものである」(一頁)、「同時にその動搖の起点、ブルジョアの発展の端初を追求したものである」(二頁)としている。つまり本書は近世封建社会の経済構造を明らかにすると共に、その動搖の起点としてのブルジョアの発展の端初を追求しようとした意欲作である。

次に本書の構成は「第一章においては近世封建社会の市場構造を分析し、第二章ではその市場構造を規定した社会的分業の特質を追求している。第三章は近世封建社会の基礎となった農民経営を、第四章は前章の分析をうけて奉公人問題を追求している。これらの分析は、近世封建社会に照応する経済構造を明らかにするため、再生産過程、社会的分業、基礎的経営とその雇傭労働の問題を、求心的に追求するという構成をとっており、したがって時期的にも十七世紀前期にかぎっている。ところでかかる経済構造の動搖・変質は、生産力の主要な担い手であった農民経営の展開により起った。第三章・第四章の後半はかかる基礎的な変化を具体的に捉えようとしたが、この小ブルジョアの農民経済が、十七世紀後半・十八世紀前半には、先進地域農村を主導として展開してくることを明らかにしている。それは社会的分業の発展と、全国市場の新たな展開をもたらしたものであったが、第五章はその

具体的様相を分析するとともに、これを国内市場形成の端緒としてとらえている。」(二頁)とする著者自身の説明が最も要を得たものといえよう。したがって問題は、この構成によって、先記本書の目的がどれほど達成されているかという事にあるのだが、この龐大な問題を短い書評にもり込む事は、非常に粗雑な処理にならざるを得ないし、また逆に全面的にこまかく問題点をおつて書評する事は、大変な労力と、恐らく本書に近い枚数を要するので、ここでは極く問題をしばって、幕藩体制下の市場構造論なんかなく、脇田氏の「全国的市場論」に限定して書評を試みてみたい。何故なら、全国的市場論を扱った一・二章が本書の核であり、また学説史的にも本書のポイントになると考えたからである。しかし正確にいえば、この全国的市場論は本書の核ではあるが、この部分からのみ本書を評点するのは甚だ不充分であつて、是非とも本書の全頁を読まれて、各位の本書評を形造られん事を願つて止まない。なお氏の全国市場論に対応する国内市場論を扱った第五章については、時代が元禄時代でもあり、私の専攻する時点と若干近いので、この部分は別に更めて私の見解を述べる機会を造りたいと思つている。なおこの段階の基本的市場構造については、拙稿「享保改革期江戸経済に対する大坂の地位」(『日本歴史』一九一号)を参照いただければ幸いである。

二 いわゆる全国市場なるものについて

脇田氏の市場構造論は、近世初頭の市場構造を論じた第一章「近世的全国市場の形成」と、その市場構造の背景をなした社会的分業について論じた第二章「社会的分業の特質」と十七世紀後

半の市場構造の展開を論じた第五章「国内市場の形成」とよりなっている。脇田氏の幕藩制下の市場構造論をみる場合、まず注意しておく必要のあることは、氏は近世初頭「全国市場」、十七世紀後半、即ち元禄期「国内市場」と市場を使いわけ、しかも近世初頭の全国市場に「近世的全国市場」と近世的という言葉をかむせていることから、いわゆる脇田氏のいう「全国市場」なるものこそ近世社会に照応する市場構造であると見做している事が判るのである。したがって市場構造論についていえば、全国市場について論じた第一章、第二章が主体であることが判る。

(イ) 全国市場の歴史的地位の設定について。

まず最初に、脇田氏は全国市場こそ、近世封建社会に照応する市場だとするのであるが、この全国市場がどのような歴史的地位を持つものとして、我々の歴史に登場してくるのか、その点を検討してみよう。脇田氏は「近世封建社会に照応する全国市場」(二三頁)について、「近世封建社会は、集権制にふさわしい、一定の全国市場を前提としていた」(三頁——傍点大石——)と特に序文でことわっているところを見ると、近世封建社会とは、一定の全国市場が前提となつて始めて成立展開するものである、との見解をとっている事が判る。ところで、このような論理設定は近世史のあり方の中にあつては全く新しい注目すべきものである。というのは現在までの近世史では市場と社会構成のありかたについて、一定の(直接生産者のありかたを主体にして組み立てられた)社会構成のありかたが、その社会の市場構成を生み出す(規定する)のだ、と直接生産者側から組み立ててゆくのが一般で、市場構成が前提されて、始めて(近世封建社会という)社会構成が

まれるのだとは考えていないからである。脇田氏の主張は、今迄の社会構成と市場構成とに関する論理とは最も基本的なところで、全く逆になっているわけである。したがって、まずこの点を問題にしてみよう。その場合問題になるのは、脇田氏の考えかたが、今迄の一般的な考えかたと逆になっているのが、良いとか悪いとかいふのでは全くない。何故脇田氏がこの論理を従来ものと逆にしたかということが、論理的・かつ実証的に本書の中で展開しているかどうかということである。そしてこの点こそ本書評価の一つの鍵を提供すると思はれるので以下次に検討してみよう。

まず何故「近世封建社会は、集権制にふさわしい一定の全国市場を前提としていた」(三頁)とするのかということの理論的説明が第一に必要なが、私の見た限りではこの点全く説明がなされていない。では次に実証過程として、当然「近世封建社会が前提としていた全国的市場」の説明があつて然るべきであるが、奇妙な事には、第一章「近世的全国市場の形成」には、すでに近世封建社会に突入していると一般には考えられている豊臣時代から寛永期に至るまでの米穀市場構造について述べているのみで、近世封建社会が前提とした市場構造なるものについては、全く触れていない。脇田氏のような説をたてるのであれば、(一) 何故近世封建社会は一定の全国市場を必要とするか、(二) 近世封建社会が前提とした市場構造とはどのようなものであるか、(三) その市場構造の上に立つて、どのような近世封建社会が、どのように構築されたか、という一章を最初に設けるべきであつたらう。以上みて来たように、脇田氏の全国市場の歴史的地位の設定に関する「近世封建社会に照応する全国市場」(二三頁)について「近世封建社

生会は、集権制にふさわしい一定の全国市場を前提としていた」(三頁)とする発言は、ただこれだけの言葉の上の発言であって、理論的にも実証的にも何等説明されていず、むしろ逆に第一章以下の叙述からは、「集権的な近世封建社会は、一定の全国的市場を造り出していった」と読みとれるがどんなものであろうか。理論的にも実証的にも何等説明されて、いない社会評論の言葉が、あちこちに然も場合によっては内容と関係なしに出てくるのは気になるところである。

(四) いわゆる全国市場なるものについて。

次に脇田氏という全国市場なるものについて検討してみよう。

脇田氏は第一章「近世的全国市場の形成」の最初に「近世封建社会においては、領主階級は農民を自給経済の枠内にとどめ、みずからはもつとも商品化しうる生産物である米を、生産物地代として取納することで農民の剰余労働を吸収しようとしたのである。……そこでは地代として取納された領主米が販売しうる条件——社会的分業の進展と、商品経済の一定度の発展が前提となり、領主階級の再生産を可能とする全国市場の存在を予定するものであった。すなわち近世的全国市場は、農民の商品経済を抑止した領主的市場として現われ、その主要な流通品は、領主米であった。」(二三頁)とし、したがって領主米の動向を中心に分析することが、近世的全国市場の内容を明らかにしうる事であるとする。さてここで問題になるのは、何故「領主階級の再生産を可能とする全国市場の存在を予定する」必要があるか、という事だが、その点は「都市と農村の分業は一般的に成立したが、この分業は跋行的なものであり、大部分の領主米は城下町で消費されず中央市場

『畿内へと送られた』(二四頁)「近世的市場の内容は、中央市場と、各藩のよる領内市場の二つの関係よりなり、後者は都市・農村の基本的分業関係を形成しているが、そのみで完結しえず、中央市場と緊密に結びついていた」(二四頁)とするのである。そしてこれが脇田氏の全国市場論の骨子でもあり、また本書の出発点をなしている。さてこの全国市場論の骨子をもとと気附く通り、このような事は、かなり早い時期から、その表現の強弱はあるが、幕藩体制社会を理解する手掛りとして一般的に云われていたことであり、然も注意を要する事は、それはかなり思い、つきの(もう一寸と良くいえば社会評論的)な軽い気持ちでいわれていた事で、誰も実証は勿論、充分な理論的な検討も経ずして云つて、いた事である(いって、いたという言葉を使って、書かれて、いたという言葉を使わないのは、農村史などの処理上全体的スケッチが一寸と必要であるといった時などに話し合の席上で使われるとか、またはレジュメ的処理に使われるとかで、學術論文の、然も市場論の主柱としては私の知る限りでは使われていなかったからである)。

本書は幕藩体制の市場論を主として扱った學術書であり、然もこの(論理)が脇田氏の出発点の礎石となつているので、当然の事ながら、従来の思い、つきの発言ですむわけでなく、どうしても脇田氏自身の手で、理論的にも再検討し、更にまた実証的にも確定する必要があるところである。勿論脇田氏はこの点についてかなりの努力を払っている。しかしこの場合の脇田氏の論理もかなり常識的で、(イ)藩の城下町には年貢米に見合うだけの町人口が存在しなかった。(ロ)藩内には一定の分業関係が存在するが社会的分業が未熟であつて、領域内でその再生産を完結させる手工業

が存在しなかった。(4) 一方畿内には特産物生産が非常に発達していた。(5) 以上の事から領主は領内の米を中央市場、畿内・大坂に送り、ここで手工業品を入手して再生産を完結した。という事になる。

さて、(4)藩の城下町には年貢米に見合うだけの町人口が存在しなく(九五頁)米を中央市場、畿内・大坂に売らざるを得なかったとする点で、これも極く常識的にこう云われているが果してそうであろうか。この点全く実証的検討はないのである。一体領内人口の何割の農業外人口があれば領内年貢米に見合うのであろうか。これらの点、従来は常識的にそう云われていたが(農村史に關連した形で)、市場論にとりくむ場合はまず確定しておく必要のある事である。また領外に米を売っているという事実、領内に年貢米に見合う町人口(農業外人口)がいなかったという事には直ちににならないのである。次に(4)藩内には一定の分業關係が存在するがしかし社会的分業が未熟であった、領域内でその再生産を完成さす手工業が存在しなかった、とする点である。脇田氏は非常に重大な事を、事もなげに断定しているが、まず市場的立場からみた場合、藩とはどのようなものだと考えているのだろうか。藩には一萬石から百萬石余のものまでもあり、各々藩領のあり方も千差万別である。そのような藩を(単なる農村史、または政治史として)市場論という立場から論ずる場合ただ藩一般で処理出来るのか一考あって然るべきであらう。次に脇田氏はこのような藩の事例として九州小倉藩を事例にとつて実証なるものをしていいるが、この場合、何故小倉藩が、このような氏の全国市場論形成の実証的拠点たり得るかに触れていない。そして「小倉藩人畜

改帳」から領内の商工業分布表(第二表・八九頁)を出したのち、「豊前における商工業人口はわずかに一〇三八名である。この人口はほぼ一戸一名となっているから一〇〇〇軒とみてよいが、これは総戸数の五%程であり、明らかに社会的分業は未熟であるといわねばならない。」(九〇頁)——傍点大石——と断定している。これが脇田氏の藩の分業關係の実証なるものであるが、これには多くの問題がある。まずこの表には脇田氏も指摘する如く、小倉藩の城下町小倉と、領内での大都市中津の両主要都市がおちている。近世社会における商工業人口は主として城下町および領内主要都市に集住している事は、従来の諸研究が示すところであるが、かかる城下町および主要都市のデータを欠いて藩内の社会的分業の分析確定が出来るものかどうか。そして農村部門のみの分析から、「……商工業人口はわずかに一〇三八名である。……これは総戸数の五%程であり、明らかに社会的分業は未熟であるといわねばならない。」と、突然飛躍的・独断的に小倉藩の社会的分業は未熟であるとの結論が出るのだが、「わずかに」とか「明らかに」とか「比較断定は何にもとずいて出てくるのであろうか。農村部門の商工業人口が一体何パーセントあったら社会的分業が充分だといえるのか、その点の確定もなしに、こんな断定的な言葉は使えない筈である。このように実証的なものへのべルをかざった思いつきの独断が多い事は、本書の一つの特徴をなしているといえよう。次に(4)の、畿内には特産物生産が非常に発達していた、とする点であるが、この事も従来しばしば云われてきたところで別に新しい見解ではないが、脇田氏はそれを実証する努力を払った点が注目される。しかしこれも成功したとはいえないと思う。

というのは「毛吹草」という史料をあまりにも全面的に使わず、史料批判による修正が不足している点に問題がある。ここで脇田氏は「毛吹草」を史料として近世初期の商品生産の状況を全国的に分析しているが、それによってえられる結論は、全国的商品生産の中における畿内・特に京都のきわだった高さと江戸のきわだった低さとをのべ、畿内諸都市の地位は江戸を含めた新興城下町に比べてきわめて高く、そのことは当時の全国市場における商品流通が、畿内を中軸として展開していることあらわれであるとしている。しかし「毛吹草」は人も知り脇田氏もまたことわっているように俳諧手引書であり、そこに示された品目は特産物段階における特徴的な商品というよりも名産ともいべきものであり、しかもそれらは観察者の主観と住所とによって大きく影響されるものである。したがってこれらの名産の有無によって各地方の産業の分布を、更に社会的分業の度合を測ることは出来ないし、それから直ちに商品流通における畿内の地位を測定するなど、なおさら出来ない仕事である。この表を蔽密につかうと大坂の名産は京都の三〇〇に対し、わずかに三六であり、これは堺の三七よりも低い。これによって大坂・堺の社会分業の深さをほぼ同じとみ、大坂に対する京都の圧倒的優位を認めざるを得ないだろう。だとすれば脇田氏の主張される近世経済上の中央市場としての大坂の地位はどうなるのであろうか。この「毛吹草」の使用は他に適當な史料のない現時点では止むを得ないことではあるが、かかる史料の使用には余程周到な史料批判と補助史料による補足を必要としよう。そうでない場合は、せいぜい補註として一つの参考的補助史料としてあげるに留めるべきであらう。次に、(二)の領主は領

内の米を中央市場・大坂に送り、ここで手工業品を入手するかたちで再生産を完結させていた、とする点である。そして、この米穀流通を軸とした全国市場が近世初頭にすでに成立しており、その中央市場が大坂であったとするのである。しかしこの点も脇田氏の実証過程の示す限りにおいては、主として西国・四国・九州および裏日本の一部から大阪へ米を送った事実があげられているのみで、それをもって米穀流通を軸とする全国市場が近世初頭に成立しており、その中央市場が大坂であったと断ずるのは、実証の体裁をとった独断といわざるを得ないだろう。東海・関東・奥羽・北陸等の諸地方の米穀の流通——脇田氏のいう地方市場の状況と中央市場・大坂への従属の関係は全く実証されていないのである。なお若干意地の悪い設問だが、藩経済はそれ自体完結しておらず、領内の米穀を大坂に送り、ここで手工業品を入手して再生産を完結していたとするシェーマも従来かなり広くいわれられてきた言葉であるが、市場構成史という形でとりあげる場合は、更めて理論・実証両面から再検討すべき事でないだろうか。

なお最後に一つ付加えると、脇田氏は本書の中に多くの表を使っておられる。この表を一寸、検算してみただけでも、もし誤植がないとすれば計算ちがいが目立つ(第一・九・一〇・二四・二二・三〇・四五・五三・五四・六八・七〇・七二・七七・八六表等)。お互いに数字は今少し大切にかいたいものである。

三　むすびにかえて

以上脇田氏の市場構成論を簡単に検討してみた。従来は正面からとりくまれる事のなかつた幕藩体制の市場構成論を、真正面か

ら、然も非常に意欲的にとりくんだという意味で、本書の学説史的意義はまず評価され、更に、脇田氏の歴史に対する並々ならぬ意欲は称賛さるべきであろう。然し、実際の成果となると必ずしも充分とはいえない。それは方法論の問題があったからだと思う。周知の如く、戦後日本の近世史は個別農村および個別経営の分析より始まったが、その分析が一定水準まですすむと、どうしても個別農村・個別経営を包む諸条件を問題にせざるを得なかった。その過程で藩制史が登場してきたが、その場合もやはり、それらを包む流通史、更に幕藩体制そのものの再生産像をえがくことなとして研究を進める事が出来なくなつた。市場構造に対するスケッチもそれと関連して行なわれた。いうまでもなく、このような段階としては当然の事であるが、幕藩体制の市場構造論・再生産論について、予測的スケッチ・若干思いつきの・かつ社会評論的な直感的把握が数多く行なわれた。それらはたとえば農村史から

見たら幕藩体制の市場構造はこのように特徴づけられるのではなからうか、又は、藩制史から見たら、このように考える事も出来るのではなからうか、といった、いわば側面よりの予備的考察であつた。それらは幕藩体制の市場構造論、または幕藩体制下における藩の再生産論として、正面から学問的検討をうけたものではなかつた。

脇田氏は『近世封建社会の経済構造』と題して、幕藩体制の市場論、再生産論を考究するに当って、これら予備的考察に少し安易にのりすぎたのではなからうか。もしそれらのうちどの一つにでも脇田氏が正面からとり組んだら、本書の重みは数段と増したのではなからうか。私はその点、脇田氏のためにも学界のためにも、大変残念である。(A5判三六一頁 昭和三十八年三月 お茶の水書房刊 定価一、〇〇〇円)

(学習院大学教授)